

2021 年度特定共同研究申請書

1.応募領域（○を付けてください） ○古代史料領域 中世史料領域 近世史料領域 海外史料領域 複合史料領域
2.申請課題名 小川八幡神社大般若経の文化資源化研究
3.新規・継続の別 継続
4.申請者 古代史料部門・教授・山口英男
5.所内共同研究者 古代史料部門・教授・田島公 古文書古記録部門・教授・尾上陽介 古文書古記録部門・教授・遠藤基郎 古代史料部門・准教授・伴瀬明美 古代史料部門・准教授・藤原重雄 画像史料解析センター・准教授・稲田奈津子 古代史料部門・助教・堀川康史 古代史料部門・助教・黒須友里江 古代史料部門・助教・小塩慶
6.希望する研究期間 2019 年度～2021 年度（3 年間）
7.課題の概要（400 字程度）（この項は広報等に利用・掲載することがあります） 和歌山県紀美野町の小川八幡神社が所蔵する大般若経は、全 600 巻（現状は折本 600 帖）が現存し、約 120 巻の奈良時代写経、約 380 巻の平安時代写経を含み、1978 年に学界に紹介されて以来、古代の文化史・地域史等に豊かな情報を提供する研究対象として注目され、本格的な研究利用のための詳細な原本調査が待たれていた史料群である。今般、関係諸方面の尽力によって環境が整い、本格調査の実施が可能となったことから、小川八幡大般若経全点の原本調査、赤外線撮影を含めたデジタル写真撮影、既存調査データの収集・整理等を行い、その成果を公表し学術資源化するとともに、小川八幡大般若経の成立・変遷・伝来等をめぐる多面的な研究を進展させ、その文化的価値を広く発信することを通じて地域・社会への研究成果還元をはかるものである。
8.研究の目的（400 字程度） 小川八幡大般若経は、全 600 巻のうち 500 巻ほどが奈良～平安時代写経で構成され、奥書には、『日本霊異記』に記事のある紀伊国那賀郡弥気里の御毛寺や、正倉院文書に登場する東大寺写経所経師の名が見え、信濃国佐久郡での書写を示すものがあるなど、極めて注目すべき内容を持ち、古代の文化史・地域史研究はもとより、大般若経の編成・伝来をめぐる通時代的な研究対象としても貴重な価値を有する。1978 年に関西大学の藺田香融氏が基本的な調査データとともに学界に紹介され、それに基づいて研究が進められてきた。しかしながら、1 巻ごと、同類の巻のまとめり、600 巻全体といったそれぞれのレベルにおける成立・編成・伝来などを総合的に検討するためには、原本情報のさらに踏み込んだ調査が必要であり、その実施は学界の渴望するところとなっていた。このたび、所蔵者である小川八幡神社と、地域において小川八幡大般若経を守り伝えてきた住民の方々のご理解が得られたことから、和歌山県立博物館及び関係の研究者と共同して全点の原本調査とデジタル写真撮影（赤外線撮影を含む）を実施し、より詳細な書誌・史料学データを収集・公開することで、

小川八幡大般若経の文化的価値を学界・社会共有のものとするとともに、同経をめぐる各時代における文化史・地域史など多面的な研究の進展をはかる。

9. 共同利用・共同研究として進める意義と期待される研究成果（400字程度）

小川八幡大般若経をめぐる史料編纂所では、2011～12年度一般共同研究『信濃史料』古代編（2・3巻）に係る未収史料の収集に関する基礎的研究」（代表：長野県歴史館・福島正樹氏）で信濃国に関わる経巻の調査を実施し、2018年度一般共同研究「和歌山県海草郡紀美野町小川八幡神社所蔵大般若経の研究」（代表：和歌山県立博物館・竹中康彦氏）で奥書に擦消のある経巻の赤外線カメラを用いた調査を行った。本課題はそれらの成果を継承・活用するものである。

近年、「正倉院聖語蔵経巻」や「薬師寺魚養経」などを対象に奈良時代写経群の調査・研究が進展しており、また正倉院文書による奈良時代の写経事業研究も厚い蓄積が形成されている。共同研究の形をとることによって、こうした研究動向の成果・達成を導入することができ、史料編纂所はそうした研究ネットワークの核としての役割を果たすものである。小川八幡大般若経の史料学データが共有されることで、地域を中心とした写経事業実施の実態や、経巻群編成の背景をなす地域を超えたネットワークの諸様相を明らかにする豊かな素材が提供されるものと期待される。また、大般若経を守り伝えてきた地域における文化的意義が示されることは地域連携と学術成果の社会還元としての意義を有する。

10. 研究の実施計画

小川八幡大般若経は、和歌山県立博物館の寄託扱いとなることが2018年度に決定し、2019年度から3年計画で同館において全600巻及び附属品等の1点ごとの調査（調書作成）とデジタル写真撮影（赤外線撮影を含む）を実施する。あわせて、過去の調査データで入手可能なものを収集し、整理・資源化をはかる。そのほか、関連する小川八幡神社所蔵史料等の調査、現地の歴史的環境の実地調査、同種のあるいは関連の写経群の調査等を必要に応じて行う。研究会を年1回程度、関係研究者に開かれた形で開催し、調査成果を検討し、従来の研究状況と新たな総合的研究成果の共有をはかる。また、研究課題の内容を広く市民・社会に伝え、成果の地域還元をはかるための講演会等を実施する（初年度・最終年度）。2019年度は、5月に予備調査を行うと共に過去の調査データを入手し、8月に3日間、2月に2日間、共同研究メンバーによる調査を実施し、調書を作成した。7月には、地元の紀美野町小川八幡神社において市民向けの講演会を開催した。2020年度は引き続き調査及び写真撮影を実施し、研究会を開催して調査成果の整理・解析を行う計画である。最終年度となる2021年度は残る調査を終了し、成果を取りまとめるとともに、長い歴史の中で地域の人々によって伝えられた文化財の優れた価値を社会に広く還元する活動を行うことを計画している。

11. 研究成果の公開計画

調査報告書の刊行、研究会等での研究報告を行うほか、市民向け講演会や、展覧会の実施等の形で社会への成果還元をはかりたい。

12. 共同研究員にもとめる役割

大般若経、奈良～平安時代写経群、その他経典類の調査に意欲・経験を有し、共同研究の活動を支え、その成果を学界共有の形で蓄積・提供することに積極的であること。